

Title	リカードウ分配理論と「不変の価値尺度」(I) : 1819-20年の手紙を検討して
Sub Title	Ricardo on income distribution and 'Invariable measure of value' during the period 1819-20 (I)
Author	羽鳥, 卓也
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.4 (1979. 8) ,p.430(26)- 445(41)
JaLC DOI	10.14991/001.19790801-0026
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# リカードウ分配理論と「不変の価値尺度」(I)

—1819—20年の手紙を検討して—

羽 鳥 卓 也

- 1 スラッファの所説について
- 2 1819年後半期のマルサスとの論争
- 3 マルサス『経済学原理』におけるリカードウ批判の展開(以上本号)
- 4 1820年5・6月のリカードウの新見解
- 5 リカードウの「不変の価値尺度」論修正の含意と未解決問題

## 1. スラッファの所説について

スラッファはリカードウが『経済学原理』第2版の刊行(1819年2月)から第3版の刊行(1821年5月)までの間のある一時期に、労働価値論をかれの経済学の全体系を支えるべき基礎として据置くことの理論的有効性に対する確信を失いかけた徴候がある、という興味深い問題を提起した。かれはリカードウの「こういう弱気は一時の気分れでしかなかった」と限定するのを忘れはしなかったけれども、少なくともリカードウがマッカロックにあてて1820年6月13日づけの手紙を書いていたときには、「価値に関する難題に悩まされた」揚句、「弱気の徴候を示したことは事実である。」と述べた<sup>(1)</sup>。スラッファはその動かしえない論拠として、この手紙のなかから、リカードウのつぎの一文を引用している。「私は時どきつぎのように考えています。すなわち、もし私が拙著〔『経済学原理』第2版〕のなかの価値論の章を書き改めることがあるとすれば、私は商品の相対価値がひとつの原因によってではなく、ふたつの原因によって規制されるということを承認するでしょう。ふたつの原因とは、つまり、問題の商品を生産するのに必要な相対的労働量と、資本が据置かれたままになって商品が市場にもち出されるまでに要する時間に対する利潤の率とであります。私がこの主題についてこういう見解を採用すると、おそらく私は、これまで私が採用してきた意見のなかに見出された難点とほとんど同じくらい大きな難点を見出すことになるでしょう。」<sup>(2)</sup>

よく知られているように、スラッファ以前の研究者の間では、『原理』初版刊行後、リカードウ

注(1) Cf. P. Sraffa, Introduction, *Works of D. Ricardo*, I, p. liv.

(2) *Works*, VIII, p. 194.

が目を追ってますます労働価値論の本来の主張から「後退」していったという見方が有力であったけれども、スラッファはみずから発掘した新たな文献上の証拠に照らしてリカードウが価値論において当初の立場から「後退」した事実は全くないと主張した。<sup>(3)</sup>ところが、そういうスラッファも、『原理』第2版と第3版との中間期にリカードウが「弱気」になっていたある一時期のあることを認めるのである。もっとも、スラッファの場合には、リカードウの「弱気は一時の気紛れでしかなかった」という点が強調されるのであって、この1820年6月のリカードウの手紙を従来の「労働価値論からの後退」説を支持する資料とみるべきではないという点が付言されているのではあるが。

スラッファがリカードウの「弱気」をただ「一時の気紛れ」にすぎないとみたにもかかわらず、1820年6月のマカロックあて手紙を重要視した理由は、かれがこの手紙のなかに、一見したところではおおよそリカードウには似つかわしくない一文を見出したからであった。その一文とは、「地代・賃金および利潤についての大問題は、全生産物が地主・資本家および労働者の間で分割される割合によって説明されなければならないのであり、それは本質的には価値の学説とは関係がないのである。<sup>(4)</sup>」というものである。

たしかにこの文章を読むと、リカードウはこの時期には分配理論を「価値の学説とは関係」づけることなしに構築できると考えていたのではないかと思われてくるだろう。だから、スラッファはこの一文に注目しながら、つぎのように指摘したのであった。「[この文章がリカードウによって書かれたのは]かれが価値に関する難題に悩まされたときのことであったが、おそらくはそこに古い穀物比率論(それは分配を価値とは無関係にするものであった)の反響のようなものをみてとることができる<sup>(5)</sup>」と。

よく知られているように、スラッファの見解によれば、リカードウは1814—15年の頃には投入と産出との差額を穀物量で測定する「穀物比率論」というアプローチによって、「価値評価を少しも問題とすることなしに」利潤率低下論を展開していたが、1817年に刊行された『原理』ではかれはこの「穀物比率論」によるアプローチを棄て、改めてかれの分配理論を労働価値論の基礎のうゑに構築するようになったというのであった。<sup>(6)</sup>だから、スラッファの眼には20年6月のリカードウのマカロックあての手紙のなかの、分配問題を分配比率によって解明することは「価値の学説とは関係がない」という趣旨の一文が、たとえ「一時の気紛れでしかなかった」にもせよ、リカードウ自身によるかつての「穀物比率論」の復活の試みを示すもののように映ったのであろう。

こうしてスラッファは、1820年6月にリカードウが「一時の気紛れ」ではあったが、労働価値論

注(3) 以上の点の概略については、拙稿「リカードウ価値論と《社会の初期段階》」(福島大『商学論集』41巻5号)pp. 119-28. 参照。

(4) *Works*, VIII, p. 194. ただし、傍点は引用者の施したもの。

(5) Sraffa, Introduction, *op. cit.*, p. xxxiii.

(6) Cf. *ibid.*, pp. xxxi-iii.

の理論的妥当性に対して「弱気」になり、同時にかれの分配理論を労働価値論の基礎から切断して展開する道を模索していたのかもしれないという大胆な所見を提出した。<sup>(7)</sup>だが、スラッフアの所見は、わずかに一通の手紙の文面を、しかもこの長文の手紙のなかのごく狭い紙幅を占める断片的文章を唯一の資料的根拠として成り立っているものにすぎない。<sup>(8)</sup>

この謎めいた文章の真実の意味内容を明らかにするためには、われわれはまず1820年6月の手紙の全文を検討する必要があるだろうが、それだけではなく、この20年6月の前後の時期にリカードウによって書かれた友人あての手紙や経済学的論述にあてられたかれの草稿類をも検討することによって、この文章がどのようなコンテクストのなかで書かれたのかを探求する必要があるだろう。実際、そのために役立つように思われる資料はかなり豊かにあるのであって、1819年後半期から21年初めへかけての、マルサスとの往復書簡およびマカァロクとの往復書簡が第一にあげられなければならないが、『マルサス評注』が1820年7月から8月へかけての期間と10月から11月までの期間とに断続的に書きつがれた草稿だったのであり、<sup>(9)</sup>『原理』第3版の価値論の章の初稿が執筆されたのが20年8月から10月へかけての時期だったということも十分に念頭におく必要がある。<sup>(10)</sup>

これらの資料を十分に検討すれば、1819年後半期以降、20年6月の問題のマカァロクあて手紙を書く前後の時期へかけて、リカードウがいかなる事情に促されてかれの『原理』第2版の価値論の章を大幅に加筆補正する必要に迫られたのか、またかれはこの加筆補正をどのような形で遂行しようとしたのか、といった点がある程度明らかにすることができるだろう。これらの点についての知見を得れば、われわれは問題の20年6月のマカァロクあて手紙の文面をリカードウのメンタル・ヒストリーの然るべき文脈のなかで読みとることができるはずであり、ひいてはこの手紙のなかのあ

注(7) このスラッフアの見解は、すでに早くミークによって支持されていた。Cf. R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1958, pp. 105-6. だが、最近になっても中村広治氏によって支持されている。中村『リカードウ体系』1975, pp. 187-90. 参照。

(8) 私はすでに15年以上も以前に、この20年6月のリカードウの手紙の文面を検討した結果、この手紙の全文を通読すれば、労働価値論に対するリカードウの「弱気の徴候」を見出すことはできないし、また分配問題の解明を労働価値論の基礎から切離そうとするリカードウの試みも読みとることができないのであり、したがって、この手紙のなかの、分配問題の解明は「価値の学説とは関係がない」という一文は、私信にはおこりがちなことだが、リカードウの「文章作成の粗雑さ」によって生まれたものとみるべきではないか、という私見を提示しておいた。(拙著『古典派資本蓄積論の研究』1963, pp. 71-2. 参照。)

私のこういう古い問題提起に対して学界からの反響は永い間皆無であったが、最近になって千賀重義氏が否定的な評価を与えられた。すなわち、氏は「この〔リカードウの20年6月の手紙のなかの、分配問題の解明は労働価値論とは関係がないという趣旨の〕言明を、リカードウがみずからの価値説から《逸脱》したものと捉えたり、私信による《粗雑さ》とかによってでなく解釈する」道を見出すことによって、はじめて局面の打開をはかることができるにちがいないと発言しておられる。(千賀「リカードウ地代論の一考察」香川大教育学部『研究報告』1部42号, 1977, pp. 24-5参照。)

本稿は、このような千賀氏の否定的論評があったことを念頭におきながら、私自身の旧説を文献上の証拠に照らして再検討することを意図して書かれるものである。

(9) この点は、20年7月27日づけおよび20年11月16日づけの2通のリカードウのミルあて手紙の文面によって明らかになる。Cf. *Works*, VIII, pp. 212; 296. また、20年10月14日づけのリカードウのミルあて手紙にも『評注』の執筆過程についての言及がある。Cf. *Works*, VIII, p. 283.

(10) この点は、20年9月4日づけのリカードウのマルサスあて手紙および20年10月14日づけのリカードウのミルあて手紙の文面から明らかになる。Cf. *Works*, VIII, pp. 229-30; 284.

の謎めいた文章に対しても、スラッファとは異なる新たな照明をあてて、その真実の文意を捉えるための手がかりを見出すことができるかもしれない。

本稿は、リカードウ『原理』第2版と第3版との中間期にリカードウが価値論および分配理論の領域において、どのように自説の再検討をすすめていたかという点を考察しつつ、前述の論点に関するスラッファの所説の是非に論及しようとするものである。

## 2. 1819年後半期のマルサスとの論争

### (1) マルサスのリカードウ価値論批判

前節末尾に記したような本稿の課題を追究するためには、われわれは1819年夏頃まで溯って考えてみる必要がある。われわれは19年7月8日づけのリカードウのトラワあて手紙の文面から、この年7月初旬マルサスがロンドンのリカードウ宅に滞在したという事実を知ることができる。<sup>(11)</sup>この頃マルサスはすでにかれの『経済学原理』の執筆にとりかかっている、その作業をある程度すすめていたようであって、その点はこの頃のリカードウの友人あての手紙の文面からうかがうことができる。<sup>(12)</sup>そして、同じ年の9月10日づけのマルサスのリカードウあて手紙の文面からすると、マルサスは7月のリカードウ宅滞在中にリカードウの価値論をめぐる論戦を挑んだ形跡がある。<sup>(13)</sup>われわれはむろん、この折の両人の口頭での論争の内容について、それ以上のことを知ることはできないけれども、この年の9月以降両者の文通によってこの夏の口頭での論争は継続されることになった。

文通による論争は前記の9月10日づけのマルサスの手紙によって開始された。この手紙は翌20年に刊行されたマルサスの『原理』のなかの議論を予告する理論内容を含んでおり、その点は以下の引用文と次節で引用する『原理』のなかの文章とを比較すれば、誰でも容易に気づくだろう。重要なものと思われるから長文の引用を避けるわけにはいかない。引用文にはパラグラフ毎に番号を付しておくことにする。

「(1) 私ども〔マルサス夫妻のこと……引用者〕が〔夏の休暇旅行を終えてヘイリベリの〕カレッジに戻ってからひと月以上、実に6週間近く過ぎましたが、その間私は拙著〔『経済学原理』〕の執筆を少しばかりすすめようと努めてきました。ところが、私はいつものようにわれわれの討論のなかの若干の主題に関する思索にひきずりとまれて遅々として捗らなくなりました。例の想定については、ロンドンでお目にかかった折にお話したと思いますが、この想定のひとつを追究していて、そこから出てくるように思われる結果に私はいくらか驚いています。

注(11) Cf. *Works*, VIII, p. 47.

(12) この点については、前記のトラワあて手紙のほか、19年6月22日づけのマカァロクあて手紙を参照されたい。Cf. *Works*, VIII, p. 41.

(13) Cf. *Works*, VIII, p. 64.

(2) 海岸で一日捜すことによって平均して半オンスの銀が拾えるものと仮定すると、その場合には貨幣は最も完全に同一の価値をつねに保持することになりましょう。それはつねに平均して同一量の労働を費やしもするし支配もするでしょう。労働の貨幣価格は永続的にはけっして騰貴も下落もしえないでしょう。だが、資本が使用されていて、しかも同一量の労働が投下されているすべての商品の場合には、資本が蓄積されれば、利潤率が低下するために価格が下落することになりましょう。穀物の貨幣価格だけは必要労働量の増加のために騰貴するでしょう。しかし、この価格騰貴はわずかであり、労働者が耐えることのできる穀物賃金の減少によって厳格に制限されているでしょう。

(3) このような事情の下では資本の利潤がどのような仕方で規制されるのかということについて、御高見をうかがいたいと思います。それが労働の貨幣賃金の上昇によって規制されるということは、明らかにありえないでしょう。なぜなら、労働の貨幣価値は変動しないからです。

(4) 貨幣の価値がつねに同じままだと想定すれば、耕作の極限へ向っての進展過程でも貨幣賃金が無条件に必然的に上昇するわけではない、と私は強く考えたいのです。必然的であるのは、ただ穀物が値上りして、ついには一定の貨幣賃金ではそれ以上の人口増加が停止せしめられるような頂点にまで達するという点だけです。貨幣賃金の上昇は富の増進過程では最も普通おこる出来事なのですが、その上昇がおこる時には、概して貨幣価値が下落しているのだと結論するのが妥当だと私は考えたいのです。実際、私は私の価値尺度を用いて、貨幣の支配する労働が減少する場合には、貨幣〔の価値〕は下落しているのだ、と直ちに主張するでしょう。ところが、学兄の理論によると、貨幣はより少ない労働しか支配できなくなるのに、その生産に資本が使用されているという付随的な事情のために同一の価値を保持できるとのことになっているのです。<sup>(14)</sup>

かなり難解な文章であって、私には全文の意味を隅々まで正確に理解することはできそうもないが、それでもおおよその見当をつけることぐらいはできそうに思える。第(4)パラグラフの末尾のセンテンスからいって、マルサスの攻撃目標のひとつがリカードウの貨幣の生産条件についての想定におかれていることは明らかであるから、われわれはこれを手がかりにして考えてみよう。

リカードウは『原理』のなかで〔ただし、われわれはここでは『原理』第2版(1819年2月刊)のテキストを念頭におくべきであろう。〕、異種産業部門間において使用される固定資本と流動資本との組合せに差異がある場合、あるいは使用される固定資本の耐久期間に差異がある場合、さらには「商品が市場にもち出されるまでの時間」に差異がある場合には、各種商品の生産事情になにも変化が生じなくても、賃金の騰落によって各種商品の相対価値に若干の変動がおこることを認めた。<sup>(15)</sup>そして、かれは貨幣をも含めてあらゆる種類の「商品が市場にもち出されるまでの時間」がいずれも一年で

注(14) *Works*, VIII, pp. 64-5. ただし、傍点を施した箇所は原文のイタリック。

(15) Cf. *Principles*, 2nd edn., *Works*, I, pp. 53-6.

ある、と暗黙のうちに仮定し、さらに明示的に、貨幣が全然固定資本を使用せずにもっぱら素手の労働のみによって生産される貴金属から成っていると仮定したうえで、賃金の騰貴はこういう貴金属と同一の生産条件の下で生産される商品の価格を不変のままに据置くけれども、そのほかのすべての商品の価格を多かれ少なかれ下落せしめると述べた。この場合、その生産に使用される固定資本の割合が大きい商品ほど、あるいは使用される固定資本の耐久期間の長い商品ほど、賃金の騰貴による価格下落の幅は大きくなる、とかれは主張した<sup>(16)</sup>。

マルサスの手紙は、リカードウが想定したような生産条件の下で生産される貴金属は、賃金の騰落や利潤率の変動の下では、けっしてリカードウが考えるように不変の価値を維持しうるものではないという見解を表明している。かれは第(2)パラグラフで、銀が「同一の価値を保持する」には、つねに一日の労働によって一定量の銀が生産されるという条件がなければならないと書いている。つまり、マルサスの意見では、リカードウが選んだ貨幣は素手の労働の生産物だといっても、それは一年間にわたって労働を雇用する資本を用いて生産されたのだから、その価値は利潤率が低下すれば下落せざるをえないはずだというのである。そこで、もしそれ自体の価値がけっして変動することのないような貨幣を想定する必要があるなら、貨幣を一日の労働を雇用する資本以上には少しも資本を使用しないで生産される貴金属と仮定するほかないのだ、とマルサスは主張するのである。

ところで、この手紙のマルサスは、上記のような「不変の価値尺度」についてのリカードウの所論に対する論難を拠点として、利潤は賃金の騰落によって規制されるというリカードウの命題に攻撃を加えてゆく。われわれはこの点についてのマルサスの立論の展開をあとづけておく必要がある。かれは第(2)パラグラフで、「完全に同一の価値をつねに保持する」ような貨幣があるとすれば、それはつねに一日の労働だけで半オンスの銀が産出されるというような場合だけだと述べるとともに、もしこのような貨幣で各種商品の価値を測れば、「労働の貨幣価格は永続的にはけっして騰貴も下落もしえない」ことになると主張する。なぜなら、この場合には一日の労働の価格はつねに半オンスの銀ということになるにちがいないからだというのである。そうだとすると、劣等地耕作の進展を伴う蓄積過程でも、貨幣賃金は騰貴するはずがない。この過程では、穀物の生産事情の劣悪化のために、穀物価格が上昇するだろうが、しかし、それによって貨幣賃金が騰貴するわけではなく、ただ穀物賃金が減少するだけである。ただし、穀物賃金の減少には限度がある。この限度を超える穀物賃金の減少には「労働者は耐えることができない」からである。他方、この同じ過程では、穀物生産の困難の増加とともに一定数の労働者あたりの産出量は減少の一途を辿るにちがいない。こうしてこの過程では、一定数の労働者の産出量は漸減の一途を辿るのに、かれらに支払われる穀物賃金の減少にはある限界がある。したがって、「資本が蓄積されれば、利潤率が低下する」のは必至で

注(16) Cf. *ibid.*, Works, I, pp. 63-4.

(17) ある。こうしてみると、ここでの利潤率の低下が貨幣賃金の上昇によってもたらされたのではないことは明らかである。なぜなら、もし真実に不変の価値を保持するような貨幣によって物価が測定されれば、貨幣賃金の騰貴はありえないことだからである。それゆえ、利潤は賃金の騰落によって規制され、その反対方向に変動せしめられるというリカードウの命題は崩壊したことになるというのである。

さきにも指摘したように、この19年9月10日づけのマルサスの手紙は、かれの『原理』のなかで展開されるリカードウ批判の論旨を予告する内容を含んでおり、リカードウに『原理』第3版のための価値論改訂という作業を行わせる最初の契機となったように思われる。

## (2) リカードウの応酬

19年7月初めにロンドンでマルサスの訪問を受けた直後からリカードウはギャトコム・パークの自邸に戻って田園の生活を楽しんでいたが、9月10日づけのマルサスの手紙に対する返書を9月21日に書いた。ここでも長文の引用を避けるわけにはいかない。

「私はお手紙のなかの主題に十分な注意を払うことができませんでした。学兄は一日の労働によって半オンスの銀が海岸で捨えるという仮定を設けていますが、学兄もこの仮定が途方もないものだということをお認めになるでしょう。学兄のいわれるように、このような事情の下では、銀は騰落することができないでしょうし、労働も騰落しえないでしょう。しかし、穀物は騰落することができるというよりもむしろ騰落することがあるでしょう。利潤は依然として、生産物のなかの資本家および労働者に割当てられる割合に依存している、と私は思います。——総生産物が減少すれば、それによって生産物の価格は騰貴せしめられるでしょうが、労働者は生産量のなかから以前よりも大きな割合を獲得することになるでしょう。それにもかかわらず、この以前よりも大きな割合は以前よりも少ない分量になり、以前と同じ貨幣価値をもつでしょう。学兄の想定される事例では、耕作の極限へ向う進展過程でも貨幣賃金の上昇が必然ではないようにみえますが、その理由は学兄が価値の媒介物の生産において資本の使用を全く排除したということにあるのです。御存知のとおり、私は貨幣が一般に考えられている以上に可変的な商品だという御高見には賛成なのです。ですから、諸商品の価格変動の多くは貨幣価値の変動のせいでおこるとみるのが妥当だと私は考えています。

〔しかし〕大きな文明国では、なんらかの重要な商品が資本を使用しないでも〔資本を使用した場合と〕同じ程度有利に生産できるとは考え難いのです。<sup>(18)</sup>

注(17) マルサスはこの手紙のなかでは、なぜ「資本が蓄積されれば、利潤率が低下する」ことになるのかという点について、なにも説明を加えていない。そこで、私はおそらくマルサスが『経済学原理』の利潤論の章のなかの「制限原理」を説いた節で示した推理方法を用いているものと推測し、本文で述べたような説明を補っておいた。なお、マルサスの「制限原理」については、拙著『古典派経済学の基本問題』1972、第3章第4節を参照されたい。

(18) *Works*, VIII, pp. 93—4.

このリカードウの文章もかなり難解であるが、おおよその意味はこうであろう。——貨幣が一日の労働を雇用する資本以上には少しも資本を使用しないで生産されるような銀から成ると仮定すれば、その場合には一定量の銀がつねに同一の投下労働量によって生産されるというのだから、このような貨幣はたしかに、マルサスのいうとおり、永続的に不変の価値を維持するだろう。そこで、こういう一日だけの労働の所産である貨幣を価値尺度に採用すれば、一定量の労働の貨幣価格も永続的に不変だということになるだろう。だが、マルサスはその点を根拠にして、利潤の変動は賃金の騰落によって規制されるという命題を否認しようとしている。しかし、こういうマルサスの推理は誤りである。その理由はつぎのとおりである。

劣等地耕作の進展を伴う蓄積過程では、穀物生産の困難によって穀物価値は騰貴するだろう。だが、穀物の価値が騰貴すれば、《労働》の価値は上昇するにちがいないのである。なるほどマルサスが想定したような貨幣を価値尺度として採用すれば、《労働》の貨幣価格はどのような事情の下でも変動することはないだろう。しかし、穀物生産の困難が増加する過程では、労働者は生産物全体のなかから以前よりも大きな割合を割当てられるにちがいないから、《労働》の価値は騰貴するにちがいないのである。マルサスの貨幣で測れば、《労働》は「以前と同じ貨幣価値をもつ」ことになるが、穀物価格が騰貴しているのだから、この同じ貨幣賃金が購買できる賃金財の分量は「以前よりも少ない分量にな」るだろう。しかし、賃金の実質購買力が減少しても、穀物生産の困難の増加の過程では、賃金が生産物全体のなかに占める割合は増加するにちがいないのであり、この割合の増加は《労働》の価値の上昇を意味するのである。したがって、この過程で必然的に生起する利潤率の低下は、依然として《労働》の価値の騰貴によるものといわなければならない。——

この手紙でリカードウが説こうとしたのは、ほぼ以上のようなことであろう。もっとも、この手紙にはもうひとつの論点が含まれているように思われるから、その点についても、少し説明しておく必要があるだろう。

リカードウは『原理』第2版で、貨幣が固定資本を使用せずに一年間労働だけを使用することによって生産された貴金属から成っていると想定したうえで、このような貨幣は、賃金の騰落や利潤率の変動によっては少しも価値変動を蒙むらないにちがいないと説いていた。これに対して、マルサスは利潤率の変動によって価値変動を蒙むらぬような貨幣を想定するためには、その貨幣は一日の労働を雇用する資本以上の資本を使用しないで生産される貴金属から成ると想定しなければならないと説くとともに、リカードウの想定した貨幣は利潤率の低下によって価値の減少を免れないにちがいないと主張したのであった。このようなマルサスの批判に対して、リカードウはこの手紙でつぎのように答えている。

銀がマルサスの想定したような生産条件の下で生産されているなら、たしかに「銀〔の価値〕は騰落することができない」はずで、それはマルサスのいうとおりである。しかし、一日の素手の労働

働によってつねに半オンスの銀が生産されるというマルサスの想定は、「途方もないもの」である。なぜなら、一日の労働を雇用する資本以上の資本を使用しないで生産される商品は、「大きな文明国では」全く例外的にしか存在しえないからである。物価の変動や所得諸範疇それぞれの騰落を測定する場合に、こういう例外的な生産条件の下で生産される貴金属を価値尺度として選ぶのは妥当ではない。

リカードウの回答は以上のような内容を含んでいるとみてよいただろう。こうしてみると、リカードウはこの手紙では、貨幣の生産条件についてマルサスと同じ想定をすれば、労働の価格が不変にとどまることになるだろうが、しかし、それによって利潤は賃金の騰落によって規制されるという命題が損われることはないかと答えるにとどまって、貨幣の生産条件についてリカードウが『原理』第1・2版で採用した想定は不適切だというマルサスの批判に対しては、少なくとも真正面から答えていない。したがって、この当時リカードウが「不変の価値尺度」論の修正を意図したかどうかは分からないが、おそらくマルサスの批判によってリカードウはこの論点について再検討する必要に迫られることになっただろう。

### (3) 論争の継続

9月21日づけのリカードウの手紙を読んだマルサスは、重ねて10月14日づけの手紙を書いて、リカードウの「不変の価値尺度」論の弱点を鋭く追及した。

「私の疑問に対する御返事は予期したとおりのものであって、私は御高見に賛成します。学兄は私の〔貨幣の生産条件についての〕想定が途方もないものだと指摘しておられますが、そのとおりです。しかし、貴金属以外の商品で、その生産に〔学兄が想定したような貴金属の生産の場合と〕正確に同一の時間にわたって使用される正確に同一量の固定および流動資本を必要としたと想定するのが妥当であるような商品がほとんどないことは確実なのですから、〔貴金属の生産に〕資本をある一定の仕方  
で充用すると想定するよりも、資本と利潤とを全く排除してしまうほうが、おそらくいっそう安全です。学兄が貴金属の生産に使用される資本に関してどのような想定を設けようと、学兄の計算の全部が必然的かつ根本的に誤りでないということは、ほとんどないで<sup>(19)</sup>しょう。」

マルサスはこの手紙では、リカードウが労働だけを一年間にわたって使用して生産された貴金属を貨幣として選定したことに対して、再度の抑判を加えているが、この手紙のマルサスはつぎのような論法を用いているように思われる。

仮にリカードウが想定した貨幣が賃金の騰落や利潤率の変動によってその価値を変動せしめられることがないとすると、貨幣以外の大抵の商品は、その生産に投下される労働量に変化が生じなくても、賃金の騰落ないし利潤率の変動があれば、価値変動を免れないということになってしまうだ

注(19) *Works*, VIII, p. 108.

ろう。なぜなら、リカードウが選んだ貨幣と同じように、丁度一年間の労働だけで生産されるような商品はこの社会では例外的にしかありえないからである。こうして大多数の商品の価格が賃金の騰落ないし利潤率の変動によって変動せざるをえないというのであれば、投下労働量こそ商品の価値決定の基本原理だというリカードウの根本命題そのものが崩壊することになるのではないか。——この手紙でのマルサスの批判的見解は以上のような内容のものともみてよいだろう。

リカードウは11月9日づけの返書で、マルサスの批判に答える。「私の計算については、私はその弁護をするためにつぎの点だけしか言う必要がありません。あの計算はなんらかの実用に供するためのものではけっしてなく、ただ原理を明らかにするために提出されたものにすぎないのです。

『私の計算全部が必然的かつ根本的に誤りでないことはほとんどないだろう』と仰言っても、それは少しも私の理論に対する論駁にはなりません。なぜなら、私はその点を否定しないからです。しかし、農業なり製造業なりの生産物のなかの、労働者を就業させる資本家によって保有される割合が、労働者の生計維持のために与える必要のある労働量に依存しているということは、依然として真実な<sup>(20)</sup>のです。」

マルサスはリカードウの想定した貨幣と同一の生産条件で生産されるような商品は、現実の世界ではほとんど存在しないという批判を加えていたが、リカードウは「その点を否定しない」と答えている。リカードウの想定した貨幣を用いての、賃金率の変動が商品価格に及ぼす影響に関する「あの計算はなんらかの実用に供するためのものではけっしてなく、ただ原理を明らかにするために提出されたものにすぎない」から、マルサスの批判は的はずれだというのである。そして、かれはこの文章の末尾のセンテンスで、利潤の騰落は「労働者の生計維持のために与える必要のある労働量に依存している。」と述べて、賃金と利潤との分配関係は投下労働量による価値規定に立脚して解明されるべきだというリカードウ年来の主張の理論的妥当性を繰返し説いている。

この手紙のリカードウの回答文は、あまりに簡潔にすぎたため、かれが『原理』第2版の「不変の価値尺度」論について見解を修正するのを感じていたのかどうかという点は、これだけの文面だけでは依然としてどちらとも判定できない。しかし、この19年後半期のマルサスからの批判によってリカードウが「不変の価値尺度」の選定問題をめぐって、いわゆる価値規定修正論の領域で、これまでの自説を再検討するのを感じはじめていたことは、おそらく否定し難い事実であって、われわれはその動かしえない証拠として19年12月18日づけのかれのマカァロクあて手紙のなかのつぎの一文をあげることができる。

「私は価値の重要な規制要因が評価される商品の生産に必要な労働量であるということを、いままで以上に確信しています。この学説には、諸商品が市場にもち出されるまでに要する時間が不等であるという事情のために多くの修正がもちこまれることを容認しなければなりません。しかし、

注(20) Works, VIII, p. 130.

これはこの学説自体を無効にするものではありません。私は価値を規制する原理について、これまで私が与えてきた説明に満足しているわけではありません。私は私よりも有能な筆者がこの仕事を企てることを願っています。——〔私が与えてきた説明の〕欠陥は、この学説がすべての難点を説明するのに不十分だという点にあるのではなく、その説明を試みてきた人間が不十分だという点にあるの<sup>(21)</sup>です。〕

見られるとおり、リカードウはこの手紙で、『原理』第2版の「不変の価値尺度」の選定問題をめぐむるかれの価値規定修正論が必ずしも満足すべきものではないことを率直に認めている。そして、その場合に、かれは特に「諸商品が市場にもち出されるまでに要する時間が不等であるという事情のため」に、価値決定の基本原則に対して加えられる修正要因の作用について、さらに考慮を重ねる必要があると指摘している。この一文も簡略であるため、このリカードウの特別の指摘がどのような意味内容を含んでいるのかという点を十分に説明するものではないが、しかし、われわれとしてはこの時点ですでにリカードウの価値規定修正論再検討の作業が始まっていたことを確認しておく必要がある。

ところで、リカードウはこの手紙で、上記論点について在来の自説には再検討を加える余地のあることを認めただけでも、投下労働量こそ商品の価値決定の基本原則であるというかれの年来の主張については、「いままで以上に確信」を強めている。こういう文献上の証拠に照らせば、少なくとも19年秋から冬へかけての時期には、かれが労働価値論の立場に立脚することについていくらかでも「弱気」になっているような徴候は全く見出されないし、また労働価値論と全く無関係な分配理論を構想しようとする気配も感じとれないのである。

われわれは本節で、19年秋のマルサス・リカードウの文通を検討することによって、この時期にリカードウがマルサスからの批判に刺激されて、労働価値論の再検討にのり出し、「不変の価値尺度」の選定問題をめぐむる価値規定修正論に関して自説を改訂するの必要を感じはじめていたということを知った。この時期の文通によるマルサスとの論争は上述したような経過を辿ったが、さきほど引用した11月19日づけのリカードウの手紙を最後にひとまず中断されたが、これはこの年11月下旬からリカードウがロンドンに滞在することになったので、両者にとってこの論争を口頭の討論で継続することが可能になったためであろう。

### 3. マルサス『経済学原理』におけるリカードウ批判の展開

#### (1) リカードウ「不変の価値尺度」論に対する批判

マルサスの『経済学原理』は1820年4月初旬に刊行された。<sup>(22)</sup> マルサスはこの書物のなかでは、前注(21) *Works*, VIII, p. 142. ただし、傍点は引用者。

(22) Cf. Sraffa, Introduction to the Volume II of *the Works of Ricardo*, p. vii.

年秋のリカードウあて手紙に記した「不変の価値尺度」をめぐるリカードウの所論に対する批判的見解を敷衍して詳述した。

マルサスによれば、賃金の騰貴が多数の商品の価格を下落せしめるといふリカードウの命題は、リカードウの場合には利潤が賃金の騰貴によって必然的に低落せしめられるという独断的な謬見を含んでいるから、そのままでは承認し難いものである。だが、この点の誤りを除去して、リカードウの命題をつぎのように書き改めれば、この命題には否定できない真理が含まれているとみることができるというのである。

「もしリカードウ氏が、利潤の低下は、使用される固定資本が多量であるためにこれまでその固定資本の利潤が生産費の主要成分を形づくってきたような商品の価格を下落せしめらるゝと述べていたのであれば、疑いもなく誰も氏の命題を背理と考えるわけにはいかなかったらう。……ところで、氏が実質的に主張してきたことは、以上のようなこと<sup>(23)</sup>なのである。」

マルサスはリカードウの命題をこのように表現し直したうえで、これを承認した。しかし、——とマルサスは議論をつづける——利潤率が低下する時、固定資本を比較的少量使用する産業部門の生産物の価格がこのように下落するのだとすれば、その逆の場合、つまり固定資本を全く使用せず、流動資本の回収も比較的速やかに行われる産業部門の生産物の価格は騰貴するということになるのではないだろうか。この点をマルサスはつぎのように述べている。

「他方で、固定資本が用いられず、流動資本が一日から一年の間に回収されるという回収時間の速やかさのために、資本の価値が資本によって雇用される労働量に対して占める割合がごく小さい種類の商品が多数ある。……したがって、労働の価格の騰貴および利潤の低下がおこれば、価格の上昇する種類の商品が多数生ずるといふことになる<sup>(24)</sup>だろう。」

前節でも指摘しておいたように、リカードウの場合には、暗黙のうちに全商品の生産に要する資本の回収期間がすべて一年と仮定されたうえで、貨幣を素手の労働のみの所産と想定したために、賃金の騰貴によって価格の騰貴するような商品は全然ないと主張されることになった。マルサスの意見によると、全商品の生産において資本の回収期間が等しく一年だというリカードウの仮定は全く恣意的であり、実際には流動資本のみが使用され、しかも資本の回収期間が一年よりも短いような商品も多数あるはずである。そして、このような商品の価値を資本の回収期間一年と仮定された貨幣で測れば、これらの商品の価格は利潤の低下によって騰貴するはずだといふのである。

マルサスは議論をつづける。以上のように、利潤率が低下する時に、前述のいわば両極端にある商品の価格が相互に反対方向に変動するのだとすると、その両極端の中間のところには価格の全く変動することのない商品が存在していると考えられることができるかもしれない。そこで、マルサスは

注(23) Malthus, *Principles of Political Economy*, 1st edn., pp. 91—2.

(24) *Ibid.*, p. 93.

こう述べている。

「疑いもなく、以上のような相反する作用をする原因の生む効果のために価格が不変にとどまるような種類の商品が存在するだろう。しかし、この命題の性質そのものからして、このような種類の商品は理論的にはほとんど一筋の境界線以上の拡がりをもたないにちがいない。……とにかく、この境界線がどこで引かれるにせよ、そこにはごくわずかな種類の物しか含まれないということが認められなければならない。」<sup>(25)</sup>

こういうわけで、マルサスの意見では、利潤率変動する時に、価格変動することのない商品は全く例外的にしか存在するはずがない。そうだとすると、あらゆる商品の生産事情になにも変化が生じなくても、利潤率が変化しただけで大多数の商品の価格は騰貴もしくは下落せざるをえないということになる。これでは労働価値論の主張は成り立たなくなるのではないだろうか。マルサスはこう考えて、つぎのように述べている。

「そうだとすると、商品の交換価値がその商品に投下された労働に比例するという学説は、どうなるのか。商品に投下される労働量が同一である間も、それらは同一の価値にとどまっているのではなく、周知の原因が絶えずあまねく作用するために、労働の価格が変動すれば、全商品の価格が変動することになるのであって、そこにはごくわずかな例外しか見出されないように思われる。しかも、このわずかな例外がどのような種類の商品から成っているかということをおおまか指摘することは、ほとんどできない。」<sup>(26)</sup>

マルサスのリカードウ価値論に対する批判は、おおよそのところ以上に見たような筋道ですすめられているが、われわれはここで、「不変の価値尺度」の選定の仕方に関するマルサスのリカードウ批判の文章を追加して引用しておくことにしよう。すでに知ったように、マルサスによれば、利潤率の低下する時、資本の回収期間が比較的長い商品の価格は下落し、資本の回収期間の短い商品の価格は騰貴すると考えられるから、商品のなかには不変の価格を維持するものもありうるだろうというのであったが、かれは言葉をつづけてつぎのように述べている。

「この〔利潤の低下によって価格が全く変動しない〕ような種類の商品は理論的にはほとんど一筋の境界線以上の拡がりをもたないにちがいない。それなら、この境界線はどこで引かれるべきなのか、と私は尋ねたい。リカードウ氏は氏の命題を例証するために、向う見ずにもこの境界線を、前払が労働の支払だけから成り、その回収が正確に一年かかるような商品のところに引いている。しかし、資本の回収に手間どって一年かかるのに、この資本のなかには原料や機械の購入に使用される部分が少しもないというような事例は、ごく稀である。そこで、実際のところ、こういう特殊な事例をとり出して、労働の価格がどのように変動しても、商品価格が同一のままであり、賃金の上昇ない

注(25) *Ibid.*, pp. 94-5.

(26) *Ibid.*, p. 95. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。

し低下が利潤の低下ないし上昇によって正確に相殺される的確な事例として選ぶ妥当な理由はないように思われる。<sup>(27)</sup>

マルサスの意見によれば、利潤率が低下する時、価格が騰貴することも下落することもなく、同一不変を維持するような商品の存在について考えることはできるけれども、リカードウのように、この不変の価格を維持する商品を、固定資本を全く使用せずに回収期間が丁度一年かかる流動資本のみを使用して生産される商品だと想定するのは、あまりにも恣意的な処置だというのである。

## (2) リカードウの賃金・利潤相反関係論に対する批判

すでに知ったように、マルサスは19年9月のリカードウあて手紙で、利潤率が変動する時でもそれ自体の価値が少しも変動しない生産物を貨幣として選び出すためには、リカードウのように貴金属を一年間にわたる素手の労働のみの所産と想定すべきではなく、貴金属をただ一日の素手の労働の所産と想定すべきだと主張した。ところが、マルサスはそこからさらに議論をすすめて、貴金属の生産条件をこのように想定すれば、利潤率が変動する場合も貴金属の価値は少しも変動しないが、このような貴金属が「価値尺度財」として選ばれているところでは、いかなる事情の下でも「労働」の価格も変動しないはずだと主張する。そうだとすると、蓄積過程における利潤率の低下を賃金の上昇の結果とみなすリカードウの命題は崩壊することになるだろう、とかれは主張したのである。こういうわけで、マルサスの論法においては、「不変の価値尺度」をめぐるリカードウ理論の欠陥の指摘が、利潤は賃金の騰落によって規制されるというリカードウの命題を攻略するための拠点として役立てられていた。ところが、マルサスは『原理』の第5章利潤論のなかでも、再びこの論法を用いてリカードウの賃金・利潤の相反関係に関する命題を批判したのである。両者の争点のひとつとして重要なものと思われるから、またしても長文にはなるが、あえて引用しよう。

「リカードウ氏によれば、利潤は賃金によって規制されており、賃金は最後に耕作にひき入れられる土地の品質によって規制されるというのである。この利潤理論は、貨幣が同一の価値を持続する間は、労働の価格がどれほど変動しようと、大多数の商品の価格が同一のままにとどまるという条件に全く依存している。実際、リカードウ氏の著作では、終始氏の計算において賃金および利潤の合計額の価値はそのように一定不変と想定されている。そこで、もしこの想定が真実であれば、確かに貨幣賃金のある一定の騰落にもとづいて利潤率を決定するためのある正確な基準が得られるだろう。しかし、もしそれが真実でないなら、全理論が崩壊することになる。もし諸商品が同一の価格にとどまらないで、きわめてさまざまな影響を受けて、あるものは騰貴し、あるものは下落し、不変にとどまるものが実にごくわずかだとすれば、われわれは貨幣賃金の騰貴からは利潤率に関し<sup>(28)</sup>てなにも推論できない。」

注(27) *Ibid.*, pp. 94—5.

(28) *Ibid.*, pp. 326—7.

この一文は、マルサスがつぎのように考えていたことを示している。——リカードウの利潤理論では、商品の価値は投下労働量によってのみ規制されるのであり、賃金の騰落によっては少しも影響を受けないはずだから、賃金の騰落はただ利潤をその反対方向に変動させるにすぎないとされていた。ところが、リカードウは商品価格の変動を分析する段になると、各種商品の生産事情が少しも変動しない場合でも、賃金が騰落すると、ごく少数の例外的な商品を除けば、大多数の商品が価格変動を免れないことを認めている。だが、これを認めれば、利潤は賃金の騰落によって規制されるというリカードウの命題自体が崩壊することになる。なぜなら、この命題は、貨幣価値が変動しなければ、賃金の騰落によってはいかなる商品も少しも価格変動を蒙むらないという見解に依存していたはずだからだというのである。——

マルサスはさらに、真に不変の価値を維持するような貨幣を想定して、蓄積過程における分配関係を分析すれば、リカードウの利潤率低下論を支える理論的根拠が全く誤ったものであることがいっそう明瞭になると主張して、つぎのように記している。

「もしわれわれが貴金属の獲得方法に関して、貴金属が最も厳密に同一の価値を確実に維持するような想定を採用するなら、つまり、貴金属がただ一日の必需品以上には資本という形をとった前払なしに素手の労働の一定量によって獲得されると仮定するなら、上記の結論が正しいことは、さらにいっそう明らかになるだろう。この場合にはほかのどんな場合よりも貴金属がいっそう完全に同一の価値を保持することは、否定できないことである。なぜなら、貴金属は同一量の労働を費やしもするし、支配もするからである。しかし、この場合には、……労働の貨幣価格が永続的に騰貴することはけっしてないだろう。けれども、このように労働の貨幣価格が騰落しえないとすれば、その騰落がなんらかの点で利潤の自然の趨勢を妨げうるとは瞬時も考えることができない。資本蓄積の続行と生活資料獲得の困難の増大とは、疑いもなく利潤を低下させるだろう。その生産にはひきつづき同一量の労働が投下されるとともに、さまざまな種類や分量の資本の援助を受けているような商品は、すべて価格が下落するだろう。……だが、穀物についていえば、その生産に必要な労働が増加するので、穀物の生産には資本が使用されているにもかかわらず、その貨幣価格は騰貴するのであり、その値上りはついに穀物賃金を減少させて人口増加を停止させるような頂点まで達するだろう。かくして、利潤に生ずる全効果は、リカードウ氏の意見では貨幣賃金の上昇によるものとされているけれども、これは貨幣賃金と貨幣価値とが正確に同じままであっても生ずるだろう。この仮定は、利潤の低下を貨幣賃金の上昇と同一視したり、労働の貨幣価格を利潤率の重要な規制要因とみなしたりすることが、どんなにはなほだしい誤りであるかをさらに明らかにするのに役立つのである。」<sup>(29)</sup>

マルサスの意見では、利潤率の変動の下でもそれ自体の価値の不変を維持するような貨幣を想定

注(29) *Ibid.*, pp. 327—8.

### リカードウ分配理論と「不変の価値尺度」(I)

するには、一定量の貴金属が一日だけの素手の労働の使用のみによって生産されると仮定しなければならないが、もし貨幣がこのような条件の下で生産される貴金属から成ると想定すれば、《労働》の価格はいかなる事情の下でも一定不変になるだろう。なぜなら、この場合には、一定量の貴金属はその生産に要した一定量の労働をつねに支配するものと考えられるからである。ところで、劣等地耕作の進展を伴う蓄積過程では利潤率は低下傾向を辿るものといわなければならない。だが、この過程で利潤率が低下するのは、貨幣賃金が騰貴するからではない。なぜなら、真にそれ自体の価値の不変を維持するような貨幣で測定するなら、《労働》の価格が騰貴することはないからである。<sup>(30)</sup>

マルサスは『原理』の利潤論の章のなかで、このようにリカードウの命題を批判したのであった。かくして、1820年のリカードウの経済学研究の主たる課題は、このような「不変の価値尺度」論および分配理論をめぐるマルサスの批判に答えることであった。だが、マルサスの批判に対する反論を作成するという作業は、リカードウ自身に「不変の価値尺度」の選定問題に関して見解の修正を余儀なくさせるという結果を伴った。われわれは次節以下でこの点を考察することにしよう。(未完)

(岡山大学法文学部教授)

注(30) マルサスが劣等地耕作の進展を伴う蓄積過程で利潤率の傾向的低下が不可避だと説いたのは、かれが『原理』の利潤論の章のなかで説いた「制限原理」の作用を考えてのことであるように思われる。なお、この点については前掲拙著『基本問題』第3章第4節を参照されたい。